

## 巻頭言

### 祈り

事務所二階の薄暗い図書室の窓に設えたロールスクリーンには、一匹の蛾が張り付いている。もうずいぶんと前から張り付いているので張り付いたまま死んでしまったのだろうか、それとも長い眠りについていていつかまた飛び立つのだろうか、夜カーテンを下ろすたびにそうしたことを思ってすぐまた忘れてしまう。夜になれば窓の灯りに多くの蛾が群がってくる。窓を開けていると網戸でも隙間から入ってきて、頭の上のランプのまわりを無我夢中で飛んでいる。蛾たちが家に帰れるように夜が開ければ閉じた窓を開いておく。そうすると、仕事から帰ってきたころにはどこかへ消えている。ただロールスクリーンの一匹は断固として帰ろうとしない。

訪問の仕事をしていると、玄関先で時折、生きたゴキブリやゴキブリの死骸を見かけることがある。インターホンを何度か押しても扉を開けてくれないお宅もある。待っているあいだに、扉にひかれたように切れ切れになったゴキブリを眺めている。あるいは、玄関先で話しながら扉に挟まれたのか押花のようにドアの隙間に張り付いているゴキブリを眺めている。事務所でも何度かゴキブリの赤ちゃんを見かけた。赤ちゃんがいるのだからお父さんやお母さんがいるはずだ。赤ちゃんはまだ用心深さが足りないからまず初めに見つかってしまうのだろう。今

は出てはいけない、ということを次第に学んでいく。昔、実家に住んでいた頃は、夜中によく彼ら、彼女らと出会った。喉が渴いたり、トイレに行ったりするとき、階下におり、電球をつける。いるのじゃないかと内心こちらはどきどきしている。そうすると、向こうも想定外の事態だったようでじっと固まってしまう。お互いに気まずい。私は見なかったことにしてそっと電気を消して寝室へ戻る。

自宅へ帰ると金魚が四匹口を開けて待っている。正確には私が帰ってきたことに気づくと口をぱくぱくさせる。私はただいま、お腹が空いたかと声を掛けて餌をあげる。金魚の餌が切れてしまったときは、仕方なくエビの餌をあげてみたことがあるが、水底に沈んでしまうが捨ててよく食べていた。沈むかどうかだけで、エビの餌でもいいらしい。子供がとってきたタニシを水槽へ入れたら水が濁りにくくなった。金魚の糞や苔を食べてくれているのだろうか。しかしそのタニシもよく見ると最近動かない。金魚はまだ四匹元気に口をパクパクさせている。水が濁ると抑うつ傾向が現れるので、そうしたら水をかえたりぶくぶくのフィルターを交換したりする。そうしたらまた元気になる。金魚は遅いよと言ってるかもしれない。

私はまた祈るようにロールスクリーンのカーテンを下ろしていく。(2024.6.2)